2018年4月21日・[那須トラピスト修道院](http://www.nastra.or.jp/access.html)

第65回身心変容技法研究会：カトリック世界の身心変容

身心変容の〈詩／ものがたり〉としての十字架のヨハネ『霊の讃歌』

鶴岡賀雄（南山宗教文化研究所客員研究員）

１．十字架のヨハネ紹介：時代、生涯、著作

**[A]**、**[B]**

２．テクスト世界の構図

《神～三位一体》

－－－

〈神秘(mystery)〉の経験＝いのち

〔「言語」以前〕

↓↑

啓示（聖書）↓　**[C]**祈り↑　**[E]**詩歌（〈**[D]**芸術〉）

〔自立言語＝〈感じる〉言葉～〈わかる〉言葉〕

↓↑

理論的解説～論説

〔知性の言語＝理解する言葉〕（Cf.**[J]**)

３．解説言語の二つの系：飛躍と共存

★解説言語Ⅰ:「無の系」（『カルメル山登攀』～『魂の暗夜』）

・「無即全(todo y nada)」の教え**[F]**

・「完徳の山」（無の道）**[G]**

・形而上学[H]：「存在の類比」の破断（「近代」へ）

●『カルメル山登攀』～『魂の暗夜』（受動的夜）の「存在論」と「心理学」

・『カルメル山登攀』：「魂の能動的夜」

　「どうすべきかactive」の原理の抽出：⇒「全面否定」：「存在論的に不在の神」に対応。

・『魂の暗夜』：「魂の受動的夜」

　「どうなる・どう感じる・どう苦しむ」のかの記述：「情感」の問題圏。（意志の主体であるより、情動の主体としての人間。）

「不在の神／神の不在」としての「闇」（「負の感情affectivity」の場面）

この「闇からの脱出」は（「いかにして」）可能か？

⇒上記の「存在論～心理学」的存在条件の中では不可能。（『カルメル山登攀』～『魂の暗夜』の事実上の「中断」は、神秘主義的沈黙の実践とも「読める」。）

⇒この「存在論～心理学的存在条件」自体から脱出すること・・・

⇒「愛の系」への飛躍 *by*

（１）〈無の観念〉:「暗く、漠然として、全てをふくんだ、愛にみちた観念(noticia oscura confusa general y amorosa)」

（２）〈神秘体験〉:「魂の本体への神の接触(toque de Dios en la sustancia del alma)」

☆解説言語Ⅱ：「愛の系」（『霊の讃歌』・『愛の生ける炎』）

◯この飛躍の性格

・言語レベルでの飛躍：「概念言語」に拠って構築される「存在論～心理学」的思考枠組み、つまりそうした思考が生み出し・そうした思考を可能にする言語系自体、からの脱出。

◯どこに「飛躍」するのか？

・まず：「根源への回帰regressus ad fontem」：「聖書の言葉」へ／「詩の言葉」（「自立した言葉」）へ

・そこから：「詩～ものがたり」の情感言語へ

（そこでは「神の存在論的不在」も、「詩～ものがたり」の一段階・一つの位相として位置づけられ、意味sense方向が与えられる。情感affectivityのレベルでも、「闇がすべて」ではない、ことの「可能性」が確保される。この「可能性」が、「現実性」に「転じる」ことが、つまり、一つの全く新たな・予期せざる出来事événementがあり得ること、現にあること、が、「ものがたり」言語の中で、語り可能となる。）

かくて、「婚姻神秘主義」が、「本質神秘主義」とは別に、出現する。

・そこからさらに：（敢えて存在論というなら、）人称的存在論personal ontology的思考への展開が望見される。

**４．「魂」の「境地」の変容の「ものがたり」としての「霊の讃歌」**

・「婚姻神秘主義」の基本ストーリー（→**[E]**）

・その展開版として、「霊の讃歌」の「ものがたり」をたどる。

**→[I]**「霊の讃歌」全文

○「婚姻神秘主義」の展開する＝開拓する地平：具体的には「祈り」の経験・時空。

（アビラのテレジアの「念祷oración mental」の定義：「私を愛していると知っている方とのふたりだけの友愛的まじわり」）

これを「婚姻神秘主義」は、（心理学でも体験記述でも存在論でも宇宙論でもなく）「ものがたり(muthos, fabula,おはなし）」として語る・言語化する。古いけれど新しい言葉のかたち。

◎「ものがたり」とは何か：

◯「ものがたり」の基本構成要素

・「主人公」がいる。：＝「私（一人称単数）」：（「誰でも」の）「自己」

・「出来事event/ evenement」が起こる。：特定の時間・場所での「体験」；「新しい（世界）」の開け。（「神秘体験主義experientialism」ではない。）

・「持続」としての「魂の時間」が、その前後に流れる。：「出来事」の咀嚼～成熟の時間。そのなか・その結果として、「主人公」が「変容」する。

・（主人公＝私の）「境涯」が、主人公の）「言う言葉」（「する行為」）として、示され～証される。

→「変容」する「魂の水準」としての「境地（境涯）」

→「変容」の「段階（階梯）」性；"scala mystica"は階段よりも重層

**５．「霊の讃歌（B版）」の構成**（「科文」の試み）

・ほとんどが、「発話（科白）」；「人称言語」「言う＝語りかける言葉」

**Ⅰ「交際」：*１～１２***

・既に始まっている。「愛に傷ついて」いる。

→いつから始まったのか？

・「捜し求め」の道程：真の出会いまで：

（１）「脱出」

（２）「他人」（自分、天使、・・）に尋ねる

（３）さらに「出で立つ」

（４～５）「自然」との応答（「自然の神化」のテーマ）

（６）「仲介・媒介（伝言）」の拒否

「恋人から〔何らかの〕認識なり感得(sentimiento)なり、あるいはその他何であれ何かのやりとりを(comunicaciones)受け取るだけの訪いは、彼がどんなお方なのかについての報せの手紙を魂に与える配達人のようなもので、魂の欲求をいっそう目覚めさせ増大させてしまう。パンのかけらが飢えを大きくするように、こんな僅かなものであしらわれていることで魂を悲しませるのである。」(6, 4)

（７）「ほのめかし」のエロティシズム

（８）「いのち」（＝本来の自己）の在処

（９）～（１０）直接見えることを願う

（１１）「死を希む」（現世離脱欲求）

「貴方の存在と美しさを目の当たりにする悦びはまことに大きいので、私の魂はそれに耐えることができず、それを見ることでむしろ私は死ななければなりません。であるなら、貴方のお姿と美しさとが私を殺してくれますように(máteme tu vista y hermosura）」(11,6)

（１２）「泉のほとりで」；「瞳～視線」としての恋人。「見つめ合い」の願い

**Ⅱ「婚約」の成就：*１３～１４・１５***

（１３）「恋人」の直視線を受ける：「神秘体験」の瞬間→視線を背ける：「脱魂」的エクスタシーの回避／「恋人（男）」（キリスト）の言葉を聞く（Cf. 「本体的言葉(palabra sustancial)」）

・恋人（キリスト）の位置：「低み」、「傷ついた神」

→相手も（愛に）傷ついていることの告白

・「キリスト教的」神秘体験論：「現世的存在様態」の肯定（内在／超越の区分の解体）。

（１４～１５）「自然」の見え方の変化

**Ⅲ「婚約」の「境地」：*１６～２２***

（１６）「わたしたち（ふたりだけ）」の成立：

「ここで彼女が、」」・この愛の結合junda de amorを、「花で飾った私たちのベッドnuestro lecho florido」という言葉で呼んでいるのは、おおいにしかるべきことである。[...]これを「私たちのnuestro」と呼んでいるわけは、同じ一つひとつの徳、同じ一つの愛un mismo amorが（つまり、神なる恋人の愛が）、いまやふたりのもの(de enbrambos)となっているからである。」(24,3)

（１６）～（１８）「現世拒否」精神の徹底（禁欲～修徳論的）

・「婚約」は「解消」可能、現世的感覚・悪魔・自我からの妨害可能

（１９）恋人にさらに求める；「私を見て」・「ほんとうのあなたを見せて」beatific visionを乞う。

（２０～２１）「婚姻」への備え：

（２２）この世の生での「合一＝神化」の可能性

**Ⅳ「婚姻」の成就：*２３～２７***

（２３）「原罪」の浄化

（２４）「新床」

（２５）～（２６）「酩酊」、「現世超越」の完成

（２７）「愛の誓い・やくそく」

・自己贈与entrega

「この歌では、この霊的婚約（？）において、双方の側がde ambas partesなした自己贈与

entregaが語られる。」(27,1)

↓

・主従の逆転

「この愛の誠と優しさ(la ternura y verdad de amor)はたいへんなもので、この広大無辺の

父が、この小さいけども愛にみちた魂(esta humilde y amorosa alma)を大切にし大きなもの

・立派なものとなされるべく、ご自身が臣下で彼女が君主であるかのごとくに、〔・・・〕ほ

んとうに彼女に仕えてくださる。〔・・・〕あたかも彼が奴隷で彼女がその神であるかのよう

になる。」(CB.27,1）

**Ⅴ「婚姻」の境地：*２８～３５***

（２８）「愛の等しさ(igualdad de amor)」（同等性≠同一性）

「[...]魂を大きなものとなすengrandecerこととして、魂を神ご自身と等しい者とすることよるigualándola consigo以上のことはないので、[...]このようになって神を愛することだけが、魂のつとめとなる。というのも、愛の本性propiedad de amorは、愛する者を愛されるものと等しくするigualar al que ama co la cosa amadaだから。かくて、魂はここで完全な愛perfecto amorをもっているがゆえに神のひとり子の嫁と呼ばれているが、これは彼との等しさ（同等性igualdad）を意味している。この、愛情の等しさigualdad de amistadのゆえに、二人がもつ一切は、ふたりに共有comunes a entrambmosとなっている。」(28,1)

・相互自己贈与(entrega)→主従逆転→回互性⇒相等性

（２９）マリア（「観想的生」）のマルタ（「活動的生」）への優位

（３０）（３１）魂に囚われる神（「ケノーシス」）

「おお、神が一すじの髪に囚われてしまうるとは、まったくおもしろく楽しんでよいことだ。〔・・・〕神が何かを見つめるmirarとは、愛することの意味だから、神がまずはじめに、大いなるあわれみのゆえに、私どもをみつめ、愛してくださったのでないなら〔・・・〕、そして自らを低くしてse abajaraくださったのでなかったなら、私どもの低い愛の髪がなびいたとて、彼を捉えることなどありえなかったろう。」(31,8)

（３２）（３３）美しくなった魂

「魂は、恋人から得た品々とその価値prendas y precioのゆえに、いまや勇気が湧いてきて、自分に自信を持つpreciándose a sí misma。自分自身では低い価値しか持っていなくて、何の評価にも値しないのに、この品々を彼がくれたのだから。それで、自分はこの品々ゆえに高く評価されるに値するのだとわかって、恋人に向かって大胆に、もう自分を軽んじず、見下さないようにと言う。なぜなら、かつては本性の卑しさと罪の穢れゆえに蔑みに値していたにせよ、あなたが初めて自分をみつめて、あなたの麗しさgraciaでわたしを飾り、あなたの美しさhermosuraをわたしに纏わせてくださったときからは、あなたはもうわたしを、二度でも、三度も何度でも、みつめてよくて、そうしてわたしの麗しさと美しさをいや増しにされているのだから。[...]」(33,3)

・自身の美しさへの自信；愛されていることの自信

→（他者経由の）自己肯定、自己愛（＝他者愛）

**VI永遠の希求態：*３６～３８***

・「完成」へ：「希望」という時間性

・「わたし」が「あなた」に／「あなた」が「わたし」に　なる。（３６）

「これは、〔…〕愛の訓練によって、永遠の命の中で、貴方の美(hermosura)の中で私たちふたりが相見る(verse)ようにいたしましょう、ということである。つまり、こうして私は貴方の美へと変容してしまって、それで、美において〔私は貴方に〕似たものとなっているので、私たちふたりが貴方の美の中で互いに見つめ合うようになるのです。私はもう、貴方自身の美をもっているのですから。このようにして、互いに相手を見つめながら、それぞれが相手の中に自分の美を見ることになるのです。一方の備も他方の美も唯一の貴方の美なのであり、私はといえば貴方の美の中に溶けいってしまっているのですから。こうして、私は貴方を貴方の美の中に見つめ(ver)、貴方は私を貴方の美の中に見つめることになるでしょう。そして私は貴方の美の中で私を貴方の中に見つめ、貴方は貴方の美の中で貴方を私の中に見つめることになるのです。こうして、私は貴方の美の中で貴方と見え(parezca)、貴方は貴方の美の中で私と見えるようになりましょう。そして私の美は貴方の美であり、貴方の美は私の美でありましょう。こうして、私は貴方の美の中で貴方であり(sere)、貴方は貴方の美の中で私であることでしょう。なぜならば、貴方ご自身の美が私の美となっているでしょうから。こうして、私たちはお互いを貴方の美の中で見つめあうこととなるのです。」[CB.36,5]

＝「わたし」の「神化・神成・成神(divinistion, deification, theosis)」

⇒「神」に「成る」「わたし」（一人称単数（主格））とは何？？

・「三位一体」への参入～吸収

「神が神のうちで息吹くように、魂が神のうちで参与participaciónというかたちで息吹くという、かくも高度な事柄を魂がなし得るということを、不可能事と思いなしてはならない。なぜなら、神は至聖なる三位一体のうちに魂を合一させるという御恵みを魂になし給うのであるなら、そこで魂が神のかたちdeiformeとなり、参与によって神Dios por participaciónとなる。〔…〕あるいはこういった方がよければ、神が魂を、魂と一緒になって、三位一体ご自身のように、三位一体のうちではたらかせられるようになさるのである。ただしそれは、分かち与えられ、参与させられるというやり方でのことであって、神がこのことをこの魂のうちではたらかれるのであるが。このことが、魂が知恵と愛において三つの位格へと変容されてあるということなのであって、そしてこのことによって、魂は神と似たものsemejanteなのである。こうしたことへと到りうるべく、神は魂を、ご自身の似像にして似姿imagen y semejanzaとして創造されたのだった。」[CB.39,4f]

「したがって魂たちは、御子〔キリスト〕が本性naturalezaによって有するこの同じ善を、参与によって所有している。だからまことに彼等は参与によって神々なのであり、神の友であり神に等しい者たちである。〔…〕それは、魂が神のうちで、神と共に仲間としてacompañadamente、至聖三位一体のはたらきをはたらくことによる。それは、〔…〕魂と神との間の本体の合一unión sustancialという根拠によってのことである。」 [ibid., 7]

**VII　最後の情景：*３９，４０***

（３９）さいごまで「夜」：

（４０）「現世」の引き下がり：

**６．問い：**

◯「身心変容」なのか？　「身体」はどうなっているか。

→「貴方が好き」なとき、貴方の身体なしに、貴方を好きになれるか、好きでいられるか、考えられるか？

（テレサのほうが、人（キリスト）を、身体的にとらえる。十字架のヨハネは、身体は，本体とは区別される。）

◯「他者たち」はどうなっているか

・「マリアとマルタ」の問題系

・「わたし」と「あなた」の「ふたり」には、「共通のもの（第三者）」がある。

◯十字架のヨハネの個人的神秘体験？

・大忘却

「神がこの合一の接触(toques de union)を記憶に対してなすときには、このようなこともある。突然、脳（ここに記憶の座がある）に強烈なショック(vuelco tan sensible)が来て、頭がぜんぶ消えてしまったかに思え、感覚も判断力もなくしてしまう。こうしたことの程度は、接触の強さに応じてさまざまだが、この合一のおかげで、記憶はあらゆる観念を空にして浄められて、すべて忘れた状態(olvidada)となる。ときにはすべて忘れきってしまって(olvidadisima)、何かを思い出すのにたいへんな力と苦労が必要になるほどである。」（『カルメル山登攀』第三部第二章５）

・大炎上

「魂はここでは、とても小さな、しかしいのちに溢れた、この上なく灼熱した一粒の芥子種のようなものを感じる。それは生ける灼熱した愛の炎をあたりに放射する。この火は〔・・・〕魂の霊的および実体的なすべての脈管を通って(por todas las espirituales y sustanciales vernas del alma)その力と強さに応じて精妙に拡がっていくのが感じられる。これによって、魂には健やかさが戻り、活力が大いに増し、この活力のなかで愛が大いに洗練されていくのを感じる。また魂のなかに愛にみちみちた火の大海が現れて、全宇宙の上から下までに及び、隅ずみにまで愛が充溢すると感じるのである。ここにおいて魂には、全宇宙は愛でできた一大海であるかに見え、そしてそこに呑み込まれている魂には、このあいの終わる果ても極みも望み見ることさえできない。」（『愛の生ける炎』第二章１０）

・本体的言葉

**７．「神秘的合一＝神化deification」の（「人称存在論」的）定義**

・〈私〉が「神（の似姿）」に成ること。

＝**「神」について「言える」ことが、すべて、「私」についても言えるようになること。**

**「神はXである。」（客観的・無人称言語）→「〈私〉はXである。」（主観的・人称言語）**

　（逆は真ではない。）

***・そのような〈私〉とは？？？***

**資料**

**[A]** 生涯

1542:フォンティベロス（アビラ県）に生まれる。三人兄弟の末子 ――1545: 父死去。――1559-63:イエズス会神学校で学ぶ。――1563: メディナ・デル・カンポのカルメル会に入会。――1564-68: サラマンカ大学に学ぶ。 ――1567: 司祭叙階。アビラのテレサ(1515-86)と会見、カルメル会改革運動に賛同。――1568: 男子カルメル会の改革運動に着手。ドルエロに最初の男子修道院設立（３人）。 ――1572-: アビラのエンカルナシオン修道院で、テレサの告解師。――1576: 反改革派によってアビラから誘拐、幽閉。ほどなく解放。――1577: 12月2日アビラから誘拐、トレドに幽閉。――1578: 8 月15日脱出。トレドの女子修道院に逃れる。10月、ハエン（アンダルシア）の副院長。――1580: 改革派独立。母死去。――1581: 改革派総会第三位 ――1582: グラナダ――1585: アンダルシア管区長代理――1590: 総長ニコラス・ドリアと対立。――1591: 7 月、メキシコ行き決定。8月ハエンの修道院に隠棲。9 月熱病。12月ウベダで死去。

1618: 最初の著作集刊行。

1675: 列福

1726: 列聖

1926: 教会博士

**[B]** 著作

詩

「ロマンセ」「霊の讃歌」「暗夜」「牧童」「愛の生ける炎」「夜なれど」他、１２編

論考（自作詩の自註）

『カルメル山登攀(*Subida del Monte Carmelo*)』；『魂の暗夜(*Noche Oscura del Alma*) 』；『霊の讃歌(*Cántico Espiritual*)』（Ａ版、Ｂ版）；『愛の生ける炎(*Llama de Amor Viva*)』（Ａ版、Ｂ版）

箴言集、等

『光と愛の言葉(*Dichos de Luz y Amor*)』、その他

書翰　３３通

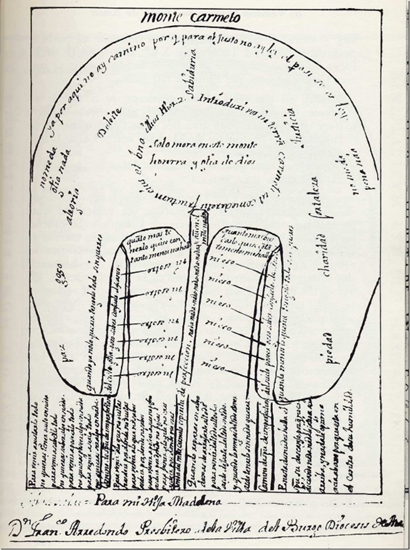
**[C]** 祈りのことば

「数多の天は私のもの、そして大地も私のもの。幾多の民も私のもの。義しき人も私のもの、罪人たちも私のもの。諸天使がたも私のもの。神の御母も、すべてのものは、私のもの。そして神ご自身も私のもの(mío)、私のため(para mí)。なぜならキリストが私のもので、すべては私のためだから。

だから、何を願い、捜しているのだ、我が魂よ。このすべてはおまえのもので、すべてはおまえのためなのに。

おまえを小さなものにするな(No te pongas en menos)。御父の机から落ちてくる小銭など気にとめるな。外に出て、おまえの栄光＝すばらしさを自ら悦べ(Sal fuera y gloríate en tu gloria)。そのすばらしさのうちに隠れ籠もり、楽しめ(Escóndete en ella y goza)。そうすれば、おまえが真心から願うものはみな(las peticiones de tu corazón)、手に入るはずなのだから(alcanzarás)。」 （『光と愛のことば』27）

**[D]** 絵　　　　　　　　　　　　　　　　　　**[G]**「完徳の山」

**[E]** 詩

１．暗い夜／愛に焦がれて　かき立てられて／なんてしあわせな冒険でしょう！／気づかれもせず家を出ました／わが家はもうひっそりとして。 (*En una noche oscura/ con ansias en amores inflamada/ ¡o dichosa ventura!/ salí sin ser notada/ estando ya mi casa sosegada*)

２．暗闇のなか　迷うことなく／秘密の梯子で　姿も変えて／なんてしあわせな冒険でしょう！／闇のなかへ　顔も覆って／わが家はもうひっそりとして。 (*A escuras y segura/ por la secreta escala disfrazada/ ¡o dichosa ventura!/ a escuras y en celada/ estando ya mi casa sosegada*.)

３．このしあわせな夜のなか／みなに隠れて　誰にも見られず／私も何も見ませんでした／導く明かりは　何もなかった／ただ心に燃えるものだけが。 (*En la noche dichosa/ en secreto que nadie me veía/ ni yo miraba cosa/ sin otra luz y guía/ sino la que en el corazón ardía*)

４．それが私を導いてくれた／真昼の光よりもっと確かに。／そこで私を待っていてくれた／よく知っている　あのひとが。／そこにはほかに誰も来ない。(*Aquésta me guiaba/ más cierto que la luz del mediodía/ adonde me esperaba/ quien yo bien me sabía/ en parte donde nadie parecía*.)

５．ああ　夜よ　あなたが導いてくれた。／ああ　黎明よりもいとしい夜、／ああ　夜よ　あなたがふたりを結んでくれた。／恋する男を　恋する女と。／恋する女は　恋する男と　同じ姿に変わってしまって。 *(¡O noche que guiaste!/ ¡O noche amable más que la alborada!/ ¡O noche que juntaste/ Amado con amada,/ amada en el Amado transformada!*)

６．花のような私の胸／この人にだけ　潔く保ってきた。／そこに　このひとはまどろんで、／私はかれをいつくしんで、／杉の扇はそよ風を送りました。(*En mi pecho florido/ que entero para él solo se guardaba/ allí quedo dormido/ y yo le reｇalaba/ y el ventalle de cedros aire daba*.)

７．お城のほうから　風がながれて／恋人の髪をまさぐる私にふれた。／その透明な手で／うなじを掠めた。／すると五感が　えてしまった(*El aire de la almena/ cuando yo sus cabellos esparcía/ con su mano serena/ en mi cuello hería/ y todos mis sentidos suspendía*.)

８．そのままじっと　すべてを忘れて／恋人に　頬よせたまま。／すべては止んだ。もうなにもしない。／思い煩いは　うち棄てられて／白百合の間に　忘れさられて。(*Quedéme y olvidéme/ el rostro reculiné sobre el Amado/ cesó todo y dejéme/ dejando mi cuidado/ entre las azucenas olvidado*.)

**[F]**「無即全」

その全て(todo)を味わう(gustar)に到るには／何ものにも味わいを得んと欲してはならない〔無(nada)に味わいを得んと欲せねばならない〕。

その全てを知るに到るには／何ひとつとして知らんと欲してはならない。

その全てを所有する(poseer)に到るには／何ひとつとして所有せんと欲してはならない。

味わうことのないものに到るには／味わうことのないところを通っていかねばならない。

知ることのないものに到るには／知ることのないところを通っていかねばならない。

所有することのないものに到るには／所有することのないところを通っていかねばならない。

存在する(ser)ことのないものに到るには／存在することのないところを通っていかねばならない。

**[H]** 「存在論」

「高級なものであれ低級なものであれ、いかなる被造物も魂を神と最短に結び付けるものではないし、神の存在(ser)との類似をもっていない。〔…〕神とそれら被造物との間にはいかなる繋がりも本質的類似もなく、むしろ神の存在と被造物の存在との距離は無限であり、ゆえに知性が、天上のであれ地上のであれ、被造物を媒介として神に到り着くことは不可能である。そこにはいかなる類似性の比例(proporción de semejanza) もないのだから。」（『カルメル山登攀』第２部８章３）

「知性は、その知解内容を以てしては、神に似たものを理解することはできず、意志は神たるものと思われるほどの快さや甘美さを味わうことはできず、記憶は神を表す観念(noticias)やイメージ(imagines)を想像力に提供することはできない。」（同、５）

**[I]**

**[J]**「霊の讃歌」序言

「これらの歌は、修母さま、なにがしかの神への愛の情熱によって書かれているように見えます。[...]神の智慧に教えられ愛に動かされている魂は、その口にすること(su decir)のうちに〔神の智慧と愛がもつのと〕ある意味で同じ豊饒さと迫力を込めるものです。ですので、私はここで、愛の稔り豊かな霊・精神がこれらの歌に込めた広がりや豊かさのすべてを解明しようとは思いません。いったい、神秘的知解(inteligencia mistica)のなかで言われた愛の言葉(los dichos de amor)、いま目の前にしているこの歌の言葉がそれなのですが、これを〔通常の〕言葉をどうにか用いて説明できると思うのは無知というものでしょう。[...]というのも、愛に満たされた魂たちに、そこに住んでおられる聖霊がわからせてくださることを、いったい誰が書き記すことができましょう。さらに、そうした魂たちに感じさせてくださるものを、どんな言葉で表現できましょう。さらには、そうした魂たちに最終的な意味で願わせてくださるものを。[...]そうしたことが生じている当の魂自身にもできることではないのです。だからこそそうした魂たちは、理論的説明(razones)でこれを解明するよりもむしろ、形象や比喩や類似によって、自分が感じていることの幾分かでも溢れ出させ、そこに隠された神秘のなにがしかを、霊の豊饒さから注ぎ出してくるのです。そうした類似物は、愛の精神がもつ純朴さと、そこに込められている知解(inteligencia)とをもって読まれるのでなければなりません。そうでないとこれらは、理性によって説明されたものより筋の通らないものになってしまいます。このことは、ソロモンの神的雅歌や、そのほか聖書のいくつかの書にも言えることです。そこでは、聖霊はその言わんとされるところの豊饒さを、日常ふつうに使われる語彙によってはわからせることができないので、諸々の秘義を見慣れない形象や類似を用いて語っておられるのです。こうしたわけなので、聖なる博士たちも、〔聖句の意味について〕たくさんのことを語っており、これからも語ることでしょうけれど、言葉によってこれを解明し尽くすことはけっしてありえませんし、これが言葉によって言われるということがそもそもありえないのです。ですので、聖句について解明されていることは、通常はそこに含まれていることの最小の部分でしかないのです。

　これらの歌は、豊饒な神秘的知解の愛のなかで作られておりますので、適確に(al justo)解明することはできないでしょうし、私の意図もそうではなくて、ただ、[...]そこになにがしかのおおまかな光を与えることに留まります。そして私はそのほうがよいのだと思います。というのも、愛の言葉(dichos)というものは、誰しもの好みに合うとは限らない一つの意味にそれを切り詰めてしまうよりも、その豊かさのままにとどめおくほうが、一人ひとりが各々の精神の力量やあり方に応じてそこから益を得ることになるからです。ですので、〔これから〕なんらか解明をしてまいりますが、その解明の内容に縛られる必要はありません。なぜなら、神秘的叡智というもの[...]は、魂のうちに愛と情熱(amor y afición)の効果を生むためには、判然と理解される必要はないのです。それは、信仰というあり方によるのであって、信仰のなかで私どもは、理解することなしに神を愛しているのですから。」（『霊の讃歌』「序言」２，３）

**魂とその恋人が交わす歌（昭和演歌バージョン）**

*恋する女は言う*

１．（いなくなった恋人に）

どこに行ってしまったの？

あなた、あたしが泣いているのに。

鹿みたいに　あなた逃げたわ

私を傷つけておいて。

あなたを呼びながら　私も外に出た。でももういなかった。

２．（他の人たちに）

そこを行かれる牧人さんたち、

丘の牧舎に行かれるのね。

もし　どこでなりとも会われましたら、

私が大好きなあの人に

伝えてください。　私は病気で、苦しんでいて、死にそうだ、と。

３．（自分自身に独り言つ）

私の恋を追いかけて

私は行くわ、この山河を越えてでも。

花を摘んだりもうしない。

獣たちもこわくない。

砦だの　国境だのも越えていく。

*自然に問いかける*

４．（自然に向けて）

ああ　森の木立さん、草の繁みさん

みな　あの人の手で　植えられたのね。

ああ　緑なす草原さん

花がちりばめられたようね。

教えて、あなたがたのところを　あの人　通りませんでした？

*自然が答える*

５．（自然からの応答）

その方なら、数え切れない魅力を振りまきながら

この木々の繁みを　急いで通って行きました。

それで、とおりすがりに目を向けられて、

そのお顔のちからだけで

繁みたちに美の衣裳を纏わせていきました。

*恋する女は言う*

６．（不在の恋人に）

ああ、誰がわたしを癒やせるというの？

もうほんとうにあなたをください。

送りつけるのはやめにして、

伝言なんか、今日限りで。

私がのぞむあのことを　言えはしないのだから。

７．（自分自身に独り言つ）

過ぎゆく人たちはみな

思い出させる、　数限りない　あなたの魅力を。

それで私を傷つける。

私を死にそうにさせてしまうこと　それは

みなごもったままの　なんだかわからない何か。

８．（自分のいのちに）

なのに、どうして永らえていられるのか

ああ　私のいのち！　おまえがいま生きているところには　いのちは無いのに。

そのうえ　おまえを殺そうとしているのに、

おまえが受けたいくつもの箭が。

おまえがあの人から受けた　あのものゆえに。

９．（不在の恋人に）

傷つけてしまったのだから、あなたはなぜ、

いやしてくれないの?　この心を。

そのうえ、攫ってしまったのだから、

どうして　こうして放っておくの？

攫った獲物を　持っていってくれないの？

１０．（不在の恋人に）

もう苦しませないで。

それができるのは他にいないから。

私のこの眼で　あなたを見たい。

あなたが私の眼の光だから。

あなたを見るためだけに　眼をもっていたいから。

１１．（不在の恋人に）

あなたの姿をみせてほしい。

その美しさとまなざしで　私を殺してほしい。

わかってほしい、愛ゆえの

この病を　治せるのは

あなたの姿と顔しかないのだと。

１２．（森の泉に）

ああ　水晶の泉

おまえの　その白銀の水面に

とつぜんに　姿が浮かび上がればいいのに

私が願っているあの瞳が。

胸の奧に　うっすら浮かんでいるあの瞳が。

１３．（現存の恋人に言う／恋人が語りかけてくる）

私を見ないで、あなた！

私　飛んでいきそうだから！／　**戻っておいで　鳩よ**

傷をうけた鹿は

丘のあたりに姿をのぞかせて

おまえの飛ぶ風を受けて　涼んでいるから。

*恋する女は言う*

１４．（こころに浮かぶことば）

私のあの人、あの山なみ

人気のない　樹々繁る谷

遙かな遠い島

響きたてて流れゆく河

愛を誘う　そよ風のささやき

１５．（同前）

静かな夜

もうすぐ朝日がたち昇るころの

しじまの調べ

ひびきわたる孤独

つかれを癒やして愛をかき立てる夜宴

１６．（恋人に（？）語りかける）

子狐どもを追い払って。

わたしたちの葡萄園　もう花盛り　だから

たくさんの薔薇で

花玉をつくりましょう。

だから　山のほうに誰も来ないようにして。

１７．（風に呼びかける）

吹き止みなさい、死んだ北風。

吹いて来て、南風。愛を目覚めさせるから。

私の果樹園を吹きぬければ

苑に香りが駆け巡って

あの人は花に囲まれて食事を摂るわ。

１８．（ニンフたちに語りかける）

ああ、ユダヤのニンフたち、

花々が　薔薇たちが

龍涎香の香をただよわしている　その間は

垣根の向こうにいてください。

私たちの木蔭には　かかわろうとはしないでください。

１９．（恋人に）

隠れて、あなた、愛しい人、

お山のほうに　お顔を向けて

そうして何にも言わないで。

ただ　おつきの女たちに目を留めて。

遙かな島々をへめぐる　この女の。

*恋する男の言う*

２０．（あらゆるものに願う）

軽やかに舞う鳥のむれ

獅子たち、鹿たち、飛び跳ねる山羊

山々、渓谷、川の岸辺、

流水、吹く風、こもる熱気

眠れない　夜のおののき

２１．（同前）

おまえたちに　心地よい竪琴の音と

人魚の歌声によって願う

おまえたちの怒りを鎮め

壁を打つのはやめてくれ

私の花嫁がもっとやすらかに眠れるように。

２２．（独り言～情景描写）

花嫁はもう入っている

憧れの快楽の園に。

思いのままに　憩うている。

うなじを凭せかけている

恋人の甘い腕に。

２３．（眠る恋人に語りかける）

あの林檎の木の下

そこで　あなたは私と愛を誓った。

そこで　私はあなたに手を差し出した。

それで　あなたはきれいになった。

あなたの母が　穢されたその場所で。

*恋する女は言う*

２４．（独り言～語りかけ）

わたしたちのベッドは花に飾られ

獅子の洞穴で囲まれて

深紅の天蓋で覆われて

やすらかに設えられて

無数の黄金の盾を繞らせて。

２５．（同上）

あなたの歩んだ跡をたどって

若い女たちが駆けていくわ。

火花に触れられたように

うま酒に酔ったみたいに

神々しい香油のような息を吐きながら。

２６．（独り言～回想）

奥深い酒倉で

恋人の手から　私は飲んだ。そうして外に出てみると

この野原　みわたす限り

知っているものは何もなかった。

追っていた羊たちもいなかった。

２７．（同上）

あそこで　この人は私に心をくれた。

あそこで　とても甘美な学問を教えてくれた。

そして私も　すべてをあげた

自分には　何ひとつのこさずに。

あそこで　この人の妻になると約束したのだわ。

２８．（独り言）

私の魂は　受けとめられた。

あの人のため　もち物はぜんぶ使う。

だからもう　羊の群は追わない。

ほかに　仕事も何もしない。

いまは　愛することだけが　私のつとめ。

２９．（独り言～人々への語りかけ）

だからもう　村の入合地に

今日から私がいなかったら　姿が見えなかったら

行方知れずと　言ってください。

だって私は　愛に駆られて

姿を消したのだから。愛の獲物になったのだから。

３０．（恋人に語りかける）

花々と　エメラルドを

爽やかな朝に摘み集めて

いっしょに花輪を作りましょう。

あなたの愛で咲いた花を

私の髪で編みあわせて。

３１．（独り言～回想～語りかけ）

この髪の一筋が

私のうなじに流れるのを　あなたはじっと見つめていた。

その髪を　私のうなじに見つめていた。

髪に夢中になっていた。

私の瞳ひとつが　あなたを縛ってしまった。

３２．（同前）

あなたが私を見てくれたとき

あなたの瞳の麗しさを　私に刻み込んでくれたのです。

だから　私をとても好きになったのです。

それで　私もできるようになったのです

私の瞳が　あなたを　心から讃えることが。

３３．（恋人に）

私を　卑く見るのはやめて。

だって　私の肌は黒いでしょうけど

私をじっと見つめていいの。

あなたが私を見つめてくれた　そのときから

麗しさ　美しさを　私のものにしてくれたのだから。

*恋する男は言う*

３４．（独り言）

白い小鳩は

方舟に　若枝を銜えて　帰って来た。

小鳥はやっと

愛するつがいを

緑の岸辺に見つけたから。

３５．（説明的独り言）

小鳥は孤独に生きてきた。

孤独のうちに　巣を懸けた。

孤独のなかの　導きは

たったひとりの　思い人

その人もまた　孤独のうちに　愛に傷ついていた。

*恋する女が言う*

３６．（恋人に）

もっと楽しみましょう　あなた

あなたの美しさのなか　見に行きましょう

あの山へ　あの丘へ

そこには清水が湧いていて

繁みのもっと奧のほうまで　入っていきましょう。

３７．（同前）

そして高いところに出たら

洞穴のある岩場まで　一緒に行きましょう

そこはとても隠れた場所。

そこに一緒に入りましょう。

そして　石榴のお酒を味わいましょう。

３８．（同前）

そこで　私に見せてくれるわね。

魂が憧れている　あのものを。

そして　私にくださいね。

そこで　あなた、私のいのちが、

遠いあの日にくださった　あのものを。

３９．（女の独り言？　ふたりの情景描写）

風がそよぎ

小夜鳴き鳥の甘い歌がきこえる。

森と　そのあでやかさ。

そんな静かな夜に

燃やし尽くして　でも苦しくない　火が燃えている。

４０．

見る者は　誰もなかった。

アミナダブも姿を消した。

包囲の陣も　やすらぎを得て

騎士たちは

水辺めざして降りていった。